

Fukui Pipe Organ Project vol.4

ウィリアム.E.グリフィスに捧げる 音楽の花束



ウィリアム.E.グリフィス
福井市立郷土歴史博物館所蔵

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ 作曲
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

パストラーレ ヘ長調
Pastorella F-Dur BWV590

ライブチツピ(18のコラール)より
Die Achtzehn Leipziger Choräle

いと高きところにいます神にのみ栄光あれ
"Allein Gott in der Höh sei Ehr" BWV662,663,664

前奏曲とフーガ ホ短調
Präludium und Fuge e-Moll BWV548

以上、オルガンソロ

宮本とも子 (オルガン)

坂本日菜 作曲
Hina Sakamoto

《新作初演》world premiere
グリフィス音楽絵本
W.E.Griffis's Musical Fairy Tale

「海の中のゆかいな音楽会」
Lord Cuttle-Fish Gives a Concert
ヴァイオリン、チェロとピアノのための
For Violin, Violoncello and Piano

ヨハネス・ブラームス 作曲
Johannes Brahms (1833-1897)

ピアノ三重奏曲 第1番 ロ長調 op.8
Klaviertrio Nr.1 H-Dur op.8

桐山建志 (ヴァイオリン)
花崎 薫 (チェロ)
立神粧子 (ピアノ)

※演奏順不同。曲目は予告なく変更になる場合がございます。

2023年 12月16日(土)

14:00開演 (13:15開場)

ハーモニーホールふくい大ホール

全席自由：一般3,000円 高校生まで500円 (5歳から入場可)

※5歳未満のお子様のご入場はご遠慮ください。
※スペースに限りがございますので、車椅子でのご入場をご希望の方は予めシン・ムジカまでご連絡ください。

■ チケット取り扱い [チケット発売日:9月28日(木)]

ハーモニーホールふくいチケットセンター

電話予約：0776-38-8282 (10:00~17:00)

WEB予約：<https://p-ticket.jp/hhf-ch>
(24時間受付/要会員登録)



チケットぴあ [Pコード 252-898]

オンライン：<https://t.pia.jp/>



Fukui Pipe Organ Project 実行委員会

電話：090-2038-6682 (金田)

■ 主催

Fukui Pipe Organ Project 実行委員会



■ 後援

福井県教育委員会、公益財団法人 福井県文化振興事業団
福井市、福井市教育委員会、福井新聞社、FBC、FM福井
(一財)バッハの森

本事業は福井県および(公財)福井県文化振興事業団の
アートプロジェクト支援事業助成金による支援を受けています。

公益財団法人日下部・グリフィス学術・文化交流基金助成事業
<http://www.kusakabegriffis.com/>



お問合せ | (有)シン・ムジカ 電話 054-294-8127 メール shinmusica@mbr.nifty.com ホームページ <http://shinmusica.com/>

Message

宮本とも子

ウィリアム.E.グリフィス

1843年生まれ。米国の教師、作家。滞日経験を元に執筆した「皇国」が日米で高く評価される。特に科学教師として赴任した福井との縁は深く、晩年妻と共に再訪し大歓迎を受けた。福井藩校で教えながら、越前の風土と人々に親しんだ若き日に廃藩に遭遇して以後、維新に至る歴史を深く学び、日本の得難い理解者と認識され叙勲される。勝海舟や新渡戸稲造とも親しかった。1928年逝去。

152年前、グリフィスは米国を離れて、初めてのクリスマスを越前で迎えました。彼は、暖炉に吊るした手編みのソックスならぬ「足袋」にお菓子を詰めて、母国の温かい家庭を想い浮かべながら、日本の教え子たちとクリスマスがもたらす心のぬくもりを分かち合い、孤独を癒したのです。それは、民族、文化は違っても、暗く寒い日に、光を灯して「クリスマスを祝う」ことが、宗教の枠を超えて受け入れられたことをグリフィス自身が実感できた瞬間でもありました。

今回の「音楽の花束」には、バッハがオルガンの為に作曲したクリスマス時期の作品と自由曲、グリフィスの絵本画に基づく新曲、10年先輩のブラームスが20代で着想して長年にわたって温めていたピアノ・トリオの作品を東ねてみました。そして、最後にオルガン伴奏でグリフィス馴染みのクリスマス・キャロルを聴衆の方々と共に歌いたいと願っています。グリフィスの背景にあった18世紀、19世紀の響きの中で、彼の存在をなお一層身近に感じて頂けたら幸いです。

なお、グリフィスに関する詳細情報は、このチラシの表面下にある日下部・グリフィス学術文化交流基金のQRコードからお読みください。

桐山建志 (ヴァイオリン)

Takeshi Kiriyama, violin

長野県出身。3才より才能教育でヴァイオリンを始める。東京藝術大学を経て同大学院修了、フランクフルト音楽大学卒業。1998年第12回古楽コンクール(山梨)第1位、1999年ブルージュ国際古楽コンクールソロ部門第1位。2005年、古楽コンクール(山梨)の審査員を務める。2017、18年には全日本学生音楽コンクール全国大会の審査員を務める。2000年秋にリリースしたデビューCD「シャコンヌ」(CAIL-728)は、レコード芸術誌特選盤となる。以後、多数のCDを主にコジマ録音よりリリース。現在、愛知県立芸術大学教授、フェリス女学院大学非常勤講師。チェンバロの大家直哉と共にデュオ・ユニット「大江戸バロック」を主宰。

立神粧子 (ピアノ)

Shoko Tategami, piano

歌曲伴奏・室内楽など共演ピアノが専門。東京藝術大学卒業後、国際ロータリー財団奨学生として米国に留学。シカゴ大学(音楽学・修士号)、南カリフォルニア大学(共演ピアノ・博士号)を首席で修了。コルドフスキー賞2年連続受賞。シカゴ・コンチェルトコンペティションで優勝。1992年帰国。日欧米の主要オーケストラ首席奏者・歌劇場のソロ歌手たちと国内外でリサイタル共演多数。ベルリン・フィルの首席ホルン奏者S.ドールなどからの信頼も厚い。また認知機能の神経心理ピラミッドを紹介した著書「前頭葉機能不全その先の戦略」(医学書院、2010年)は、脳神経外科内科・リハビリテーション医療の分野で話題に。現在、フェリス女学院大学名誉教授、日本芸術文化振興会プログラムオフィサー、日本ピアノ教育連盟理事、米国Pi Kappa Lambda会員。

花崎 薫 (チェロ)

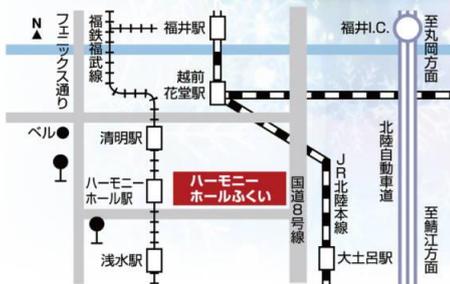
Kaoru Hanazaki, violoncello

東京藝術大学在学中、ドイツ学術交流会給費留学生としてベルリン芸術大学に留学。文化庁在外研修生としてドイツ、カールスルーエ音楽大にて研修。第50回日本音楽コンクールチェロ部門3位入賞。長年にわたり、新日本フィルハーモニー交響楽団の首席奏者として歴代の指揮者のもと、オーケストラを支えた。2011年、新日本フィルを退団、現在、愛知県立芸術大学教授。東京藝術大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。2013年より大阪フィルハーモニー交響楽団客演首席奏者。東京クライスアンサンブルメンバー。エルデーディ弦楽四重奏団よりCD多数リリース。2022年ペートヴェン、チェロとピアノの為に全作品CDをリリース。2011年、所属する東京シンフォニエッタの活動により、サントリー芸術財団佐治敏三賞を受賞。

宮本とも子 (オルガン)

Tomoko A. Miyamoto, organ

米国ニューイングランド音楽院及び同大学院を優等で修了。オランダ政府給費生としてアムステルダム音楽院に学びソリスト・ディプロマを得る。1976年よりクラヴィコードを手元楽器として歴史的建造法に基づくオルガンで演奏・教育活動に携わる。福井県では2004年のオルガン設置に伴い、3年間、普及・教育活動を行った。2009年よりつくば市の(一財)バッハの森でドイツ・コラールの歌詞内容を学ぶ。2010年にCD「クラヴィコードの世界～秘められた音楽領域を探る～」浜松市楽器博物館コレクションシリーズ23、2017年にCD「バッハの森からの贈り物～オルゲルビュップライン～」、2018年にCD「Soli Deo Gloria～J.S.バッハ:クラヴィアニューアング第3巻～」をリリース。いずれもレコード芸術誌の特選盤となる。フェリス女学院大学名誉教授。



電車でお越しの場合

JR福井駅もしくは武生駅から福井鉄道福武線乗り換え、「ハーモニーホール」駅下車(徒歩3分)

チケット提示で 福井鉄道福武線(越前武生～田原町)をご利用の場合、駅員又は乗務員への当日の公演チケット提示により、上記区間どの駅からでも片道大人200円(こども100円)の割引運賃でご乗車できます。(普通電車のみ停車)

※JR福井駅からタクシーでお越しいただく場合は、約15分です。
※JR大土呂駅からは公共交通機関がなく、徒歩で約20分かかります。

バスでお越しの場合

福鉄バス 福井・鯖江・武生⇄越前海岸方面(福浦線)「ハーモニーホール」バス停

グリフィスと福井パイプオルガン・プロジェクト(F.P.O.P.)について

1870年7月21日、東京の大学南校教師を勤めていた米国オランダ改革派教会の宣教師G.F.フルベッキは、本国ニューヨークの外国伝道局主事ジョン M.フェリスに宛てた手紙で、福井藩からの教師派遣要請について伝えました。「あなたが適当と思って派遣される方なら、わたしは引き受けますので、本人とあなたとの間で取り決めた契約によってよいのです」(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』)。この要請によって、選ばれて福井に赴任した青年が、ウィリアム E.グリフィスでした。

フルベッキもまた、ジョンの父で前任の主事アイザック・フェリスによって日本に派遣され、長崎での教育活動によって要人の信頼を得て、明治新政府の高等教育を託される立場になった人でした。長崎での教え子であった横井左平太・大平兄弟の密航渡米にあたり、ジョンへの紹介状を書いたフルベッキは、その後の書信に困惑の念をつづっています。「二人の教育上またはその他の目的について全責任をもたれるようご心配くださると思わなかったのです」(高木不二『幕末維新期の米国留学』)。ジョン M.フェリスはフルベッキが予想もしていなかった好意を日本から来た青年たちに示し、彼らをニューブランズウィックの学校に通わせました。この後、日下部太郎をはじめ陸続と日本青年が彼の地で学ぶこととなりますが、その道はフルベッキとフェリスがつくったものでした。やはり伝道局によって派遣された宣教師メアリ・キダーは、横浜で女学生を教えた学校に、フェリス親子を記念した名前をつけました。現在のフェリス女学院です。

「親愛なる叔父さま、音楽と歌唱は私の喜び、また命です。…私はピアノとオルガン演奏、合唱と独唱から始めたいと願っています」(井上篤夫『フルベッキ伝』)。

宣教師になる前の若きフルベッキが親族に書いた手紙には、彼の音楽への情熱がつづられています。優れた歌い手、演奏家だったフルベッキは、開国まもない日本の若者たちにとって、西洋音楽への導き手ともなりました。

キリスト教にもとづく女子教育に献身する 150 年の歴史において、フェリス女学院は多くの日本人が讃美歌とオルガン演奏に出会い、学ぶ場所でもありました。戦後まもなく設けられた音楽科は、平成に入り音楽学部に発展し、1990年フェリス・ホールのパイプオルガン設置以来、2000名を超える学生がそのオルガンによる教育を受けてきました。

1997年に開館した福井県立音楽堂(ハーモニーホールふくい)には、ベルリンのオルガン製造所カール・シューケ Karl Schuke 建造のパイプオルガンが2004年以来設置されています。設置にあたり、福井市民オルガン講座の担当講師を務められ、またオルガンの魅力を紹介するプログラムの企画・演奏などに取り組まれたのが、フェリス女学院教授(現在名誉教授)のオルガニスト宮本とも子さんでした。

宮本さんは、フルベッキの愛弟子であった御祖先が、グリフィスと直接会って関わったと

いう縁もあって、ご自分がグリフィスゆかりのまち福井の人々と出会い関わられたことを、とても大切にされています。20年以上勤められた大学を退任された後、福井の“大オルガンの可能性をいろいろな角度から、なお一層ご紹介したい”との思いから、Fukui Pipe Organ Project（エフポップ）を、思いを同じくする音楽家の方々と共に立ち上げられました。

フェリス・ホールの米国製パイプオルガンは 18 世紀ドイツ建造様式で、「バッハのオルガン曲が理想的に演奏できる楽器」を目指し、歴史的研究に基づいて建造されたとのこと。バッハが聖書の内容をドイツの庶民に伝える歌曲として最晩年に書き残した讃美歌（コラール）全 18 曲を、宮本さんはドイツ製の福井のオルガンで、6 回の演奏会に分けて公演される企画を進めていらっしゃいます。先日第 3 回の公演を終え、次回は「ウィリアム・E・グリフィスに捧げる音楽の花束」と題して本年 12 月に開催の予定です。

自らの巨大な功績を公言することのなかったフルベッキの高貴な生涯について、伝記を著して後世に伝えたのはグリフィスでした。グリフィスはキリスト教伝道者の道を志してラトガース大学に入学し、その信仰に基づいて日本の若者たちに教育しました。実はラトガース大学にも、福井と同じく Karl Schuke 建造のパイプオルガンが設置されています。幾多の縁に紡がれたこのプロジェクトに、多くの方々のご参加をいただければ幸いです。

<https://clavichord-organ.com/>